

第3回（通算第22回）子育て講座（子育てについて聖書に聞く会）

2018. 9. 13 子供の家幼稚園

宗教主事 浦上結慈

「あなたはわたしの助け、わたしの逃げ場」（詩編40：18）

「自己責任」という言葉を最近耳にしません、それだけ「自己責任」が世の中に定着したのだらうと思います。何をしても、結局は本人の「責任」。確かにそうです。それが正解でしょう。しかし、この言葉の流行以来、なにか人間関係が殺伐としてくるように思えるのは私の偏見でしょうか。正しいのに、何かおかしい。そして、実は「自己責任」というこの言葉のために言えなくなってしまった言葉があるのをお気づきでしょうか。「助けて」という言葉です。

茂木健一郎さんが東大で講座を持っていて、授業をした時の率直な感想がある本に紹介されていました。「東大生ってやはり未だに打ち解けるのが難しい子が非常に多い。自分の弱みを見せることがとても苦手で、何かわからないけれど基本的に守ろうとしています。…他人が何かを知らなかったり、困っているときに、優越感を持った微笑みで見守ることはできるのだけど、それに共感するとか、即座に手助けするということはなかなかできない。それは彼らの責任というよりも、それまでの道筋を見ると、結局他人を助けることで高く評価されたことがまずないからでしょう」。

現在は誰かを助ける・助けられるという関係が評価されない社会になっていることであり、また、助け合うという経験そのものがないのです。そして、その経験がないまま大人になってしまった子どもがいるということに茂木健一郎さんが驚いているのです。

北九州でホームレス支援を長年おこなっている奥田知志牧師は、講演の中で「ここ最近数年以内に『助けて』と他人に言ったことがありますか」と訊くとほとんど静かに誰も手を挙げないと残念そうに本に書いていました。

私たちも「助けて」と言ったことがありますか。それを言ったのはいつでしたか。

私たちの間から「助けて」という言葉が消えています。大人が使わないから子どもも使いません。いや、使うはずがありません。言葉を知らないから。いや、知っていても、どういう時に使ったらいいか分からないから。

本当は、子どもは大人に比べていろいろできないことが多いから使ってもいいはずなのです。しかし、子どもの会話の中から「助けて」という言葉が出てきません。

「助けて」と言ったら「負けた」と思うってしまうのです。自分の弱さが露呈されたとおもってしまう。しかし、自分の弱さを出せない社会っておかしくないですか？

世の中、いい意味で迷惑をかけあうことから関係が成り立っています。夫婦だって互いに迷惑を受け入れあっている間柄です。「絆」も迷惑をかけあうことで誕生します。傷を受けることが「絆」なのだとは先ほどの奥田牧師は言いきりました。迷惑を受け入れるというのは、相手のために時間を割き、身銭を使い、労働を提供し、思いを尽くし、傷つくことなのです。

しかし、世の中が便利になることは自分一人で何もかもできる社会になることだと私たちは漠然と考えています。コンビニには老人が一人で生きていくためのさまざまな工夫が置かれていることに気づきます。しかし、そんな生活が長続きするのでしょうか。もし私たちが「科学の発達とは人が一人で生きることである」と定義したとしたら、それはとんでもないことであって、そんな社会になると私たちは皆が「孤」になるしかありません。隣家の住人がいつ死んだかも分からない社会って異常だと思いませんか。

私たち親も、あと数十年したら老年になります。私自身もう老年です。今のうちから日頃の生活の中で「助けて」という言葉を意識的に使い馴らしていないと、老年になってあっちが痛み、こっちも痛んで思いのほか不自由になった時に初めて使い出しても、果たして円滑な人間関係が築けていけるのでしょうか。

このことは、子どもの将来に対しても言えることであって、今、親が「助けて」という言葉を日常生活の中で使っていないと、やはり、子どもも使わないで成長してしまいます。親が普段の生活の中で「助けて」を使っているから、子どもも「なるほど、こういう時に使うんだなあ」と学習して、子どもも「助けて」を使い始めるのです。ですから、「助けて」という言葉は私たちの老後のためだけでなく、子どもの未来のためにも大切なことであり、「助けて」と言ってお互いにいい迷惑をかけあうということは、将来の人間関係をよくするためにも大切な言葉であると思うのですが、いかがでしょうか。

聖書には「助けて」という言葉がたくさんでできます。聖書は神のもとにある人間関係を記した本だからです。そうです。人間は互いに関わりあい、助けあい、援助し合って生きていくのです。「自己責任」という言葉の流行によって、生きる上で一番大切な「助けて」という言葉が死にかかっている現実を踏まえ、将来、「助けて」を死語にしないためにも、私たちは意識的にも日常生活の中で「助けて」を頻繁に使っていきたくと願っています。

この言葉が飛び交い始めると、もっと生きやすくなりますよ。構えていた肩の力もフニャッと抜けます。

■上記の文章は、9月13日（木）開催の原稿です。有意義なひと時を持つことができました。

■次回は11月15日（木）午後1：00の予定です。